南京感想

土井亨(立命館大学応用人間科学研究科)

私は今回のセミナーにカメラマンとして参加した。ワークの参加者とは立ち 位置が違ったため、見えていた景色や、感じていたことは異なる部分も多いよ うに思う。私は今回最初から最後まで自分の2つの居所について葛藤し続ける ことになる。1つは日本人であること。もう1つはカメラマンであること。

カメラマンとして撮影時に一番気を使っていたことは、グループの進行の邪魔にならないこと。ドラマセラピーにおいて、プロセスが重要視されていることは知っていた。だからワークの最中の撮影はとても不安なものであった。自分のカメラが進行を邪魔したり、カメラを意識した人になんらかの作用が起こることがとても不安だった。そのため可能な限り、人が立っている時には自分も立って撮影し、座っている時には座り、グループのメンバーではなくとも目立たず、グループに馴染む方法を模索していた。

ワークが進むにつれて1人の日本人として、ワーク参加者が感じている悲しみ・痛み・罪悪感に共感・共鳴し、胸の奥から感情が沸いてくるのを感じた。それは、ワークの参加者の多くが感じることのできた感情に近いと思う。私の場合立ち位置は異なっていたが、レンズを通して相手の悲しみや痛みが流れ込んでくるようだった。しかしもう1つのカメラマンとしての苦しみが全く異なる地層から表れていることに気がついた。私は、自分をさらけだし、全身で痛み震える人にカメラを向けることに大変な苦痛を感じていた。それは相手の悲しみに共感した分重く強く圧し掛かってきた。

カメラを長いことやっていると、その加害性を強く意識する。カメラ嫌いの人にとってだけではなく、カメラを向けることそのものがある種、加害性を持っていると認識している。私の尊敬する友人のカメラマンがカメラの加害性について「カメラは銃だ」と言っていた。カメラは向ける相手との信頼関係なしには撮れない。銃を向けても、悪意を向けていないことを証明できる関係でなくてはならない。それは決して容易いことではないことは重々承知している。

そして、その加害性を持つカメラマンであることは、最初から最後まで、私の中で葛藤し続けた。ワークを通じて1人1人が自分をさらけ出し裸になっていく中、自分ひとりがカメラという銃を持ち、加害性を潜めているようで辛かった。正直カメラを下ろしたくなる場面が幾度とあった。

それと同時に日本人としての葛藤も感じていた。特に2日目、自分が日本人であることを強く意識し、加害側の国であることの葛藤を強く感じた。それは生存者の方の証言を聴いていた時。私はずっと彼にカメラを向け続けていた。最後感想を述べる際、とっさに振られて出て言葉は「日本生まれ、日本育ちの日本人です」だった。その一言を言うと涙が一気にあふれ出した。何が悲しいとか辛いとか頭で理解するよりもずっと早く涙が出た。涙が出る理由を探す時間もなかった。

とても印象的だった場面は、慰霊碑の前。日本人チームがそれぞれのスタイルで、全身で慰霊を、謝罪をするなか、私1人がカメラを回し続けていた。泣き崩れるメンバー達にレンズを向けた。「こんな場面で悲しむ人にまでカメラを向けて。自分はなんてヒドいやつなんだろう・・・」と思った。カメラを構える自分の姿は見えなかったが、そのイメージは銃を構える日本兵の姿と完全に重なっていた。慰霊碑の前で銃を構える日本人兵士。涙がとめどなく溢れてきたが、何故こんなにも悲しいのか、その時はわからなかった。今もうまく消化しきれていない。どれくらいの時間がたったかわからない。ある所で私はカメラはもう十分だと思った。十分画は撮れた。もういいじゃないかと・・・。そう思った瞬間にすぐに身体が動いた。カメラを下ろしてみんなの輪に加わった。そしてずっと言いたくて言えなかった、1人の日本人としての謝罪の言葉も言えた。

最後の夜に日本人参加者の1人に「泣くカメラマンを初めて見た」と言われて自分がおかしかった。色んな現場でカメラマンを見ているが、確かに泣いているカメラマンは私も見たことがない。カメラマンが本来、客観的に物事を記録し、その仕事を成すのであれば、私はカメラマン失格であると思う。私はあまりに自分の感情に左右されすぎている。しかもそれがコントロールできないほどに。だから依頼を受けた身としては、カメラマンとしての仕事はあまりに不十分で非常に申し訳ないと思う。しかしその一方でカメラマン失格でもいい

かなとも思っている。何故なら感情が揺らいだり、悲しみを享受し、共に悩み 葛藤することはあの場面では自然なあり方だったと思うからだ。その自然さは 他のカメラマンには撮ることのできない画が撮れる、私だけの立ち位置であっ たと思う。

私はカメラマンであったが、撮影中自分を置き去りにし、切り分けることはできなかった。レンズを覗いていたのは、いつも土井亨という日本人カメラマンである私だった。だから記録された映像・写真には、客観的なワークの記録ではなく、レンズを通してある日本人カメラマンが感じとった、痛みや悲しみ、罪悪感そして希望や安心の感情がちりばめられている。

南京的感想

土井亨 (立命館大学応用人間科学研究科)

我是以摄像师的身份参加此次活动的。因为与活动参加者的立场有所不同, 所以我看到的景色和感受到的东西可能和参加者有很大差别。从活动开始到结束, 我心里一直纠结着自己的两个身份。一个是日本人,还有一个就是摄像师的身份。

在工作中作为一名摄像师,我很注意不影响活动本身的进行。我知道戏剧疗法非常重视过程,但在工作坊进行过程中必须摄像。我很担心自己的摄像机会影响活动的正常进行,或者对意识到镜头的参加者可能会产生某些作用。因此,我摸索了一些使不属于参加者的自己也能够以不引人注目的方式融入团体的方法。比如尽量在大家站起来的时候也站着摄像,大家坐着的时候也坐下来。

随着工作坊的深入展开,作为一名日本人,在与工作坊参加者所感受到的悲伤、痛苦、罪恶感产生共感、共鸣的同时,我的心中也涌出了很多情感。这些情感应该和工作坊参加者感受到的东西相似。但因为我所处位置的不同,对方的悲伤和痛苦都是通过镜头传达到我心里的。而另外,作为摄影师的痛苦也涌出了地层。我必须将镜头对准向大家开放自己、深陷伤痛的人,这令我非常痛苦。而对方的悲伤产生的共鸣更加沉重地压过来。

常常做摄像工作的话,就会强烈意识到摄像的伤害性。这不仅仅是对不喜欢面对镜头的人而言,我发现某种意义上,镜头对准本身就存在伤害性。关于镜头